

氏 名	ナカ ムラ ジュン コ 中 村 純 子
学 位 の 種 類	博 士 （音楽学）
学 位 記 番 号	博 音 第 230 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈論文〉スコア・リーディングからピアノ演奏表現へ ― 19世紀パリのオペラとピアノの関係を中心に ―

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	准教授	（音楽学部）	照 屋 正 樹
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	ローラン・テシュネ
（ 〃 ）	〃	教 授	（ 〃 ）	西 岡 龍 彦
（ 〃 ）	〃	准教授	（ 〃 ）	山 下 薫 子

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、スコア・リーディングの本質と可能性を明らかにすることにある。19世紀パリで同時期に栄えていたオペラとピアノの関係に焦点を当て、オペラ作品のフル・スコアをピアノで演奏表現する行為の分析を通し、この行為の本質と可能性が、音楽に関わる多様な事象と演奏者の密接な関わりにあることを明らかにした。また、「スコアを弾く行為」の本質と可能性を活かした総合的なソルフェージュ教育を行うために、重視すべき点と授業案を提起した。

第1章では、音楽教育の現状における問題点を挙げ、具体的な研究方法とその対象者を明示した。

第2章では、19世紀前半のパリにおいて、オペラとピアノが同時期に流行し、パリに音楽家が集まった背景や、ピアノ演奏家兼作曲家の音楽活動と当時のパリ音楽院の教育を概観した。そのうえで、ピアノ学習者がオペラを学び演奏する意義について考察した。

第3章ではドニゼッティの《ランメルモールのルチア》とモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》を対象とし、楽曲分析と演奏法の提示により、スコア・リーディングの行為を詳細に検討した。まず、19世紀パリで出版されたスコア・リーディングを扱う教則本を概説した。つぎに、そこに記され現在でも活用できる以下の4つの要素をもとに、スコア・リーディングで体得できることを抽出した。すなわち、①歌唱および楽器の音色の特性と表現、②和声法、③主要声部の把握と伴奏音型の選択、④作曲様式の理解である。各要素に対して演奏法を示し、これらの要素が演奏表現にあらわれる点を明確化した。

第4章第1節では、第3章で分析した結果を受け、「スコアを弾く行為」とは、楽譜を通して様々な事象と関わり合う行為であることを論じた。具体的には、①楽譜を含む様々な資料との関係、②ピアノや声楽を含む様々な楽器奏法についての知識とそれらの演奏者との関係、③音楽に関わる人々の知識や感覚の共有の3点を示した。これらを明確にすることにより、「スコア・リーディングの本質と可能性」を提示し、第2節では、それを活かした授業案を提起した。

「スコア・リーディングの本質と可能性」は、その行為により多様な事象と演奏家の関係がより密接になることにある。それは次の3点に集約される。

1. 楽譜と資料

ある楽曲に対し、まず、時代やジャンルの共通する楽曲とその楽譜、つぎに、楽曲や作曲家、楽曲の属する時代を知るための資料、さらに、自筆譜や複数の版を参照することがすべて演奏行為に役立つ。

2. 原曲の楽器とピアノの演奏法

歌唱や楽器の知識を身に付け、その演奏法を学ぶことで、楽曲をより深く知ることができる。また、

楽譜の指示通りに演奏するのではなく、自らピアノの演奏法を開拓する必要がある。

3. 知識と感覚の共有

旋律や和声、リズム、拍節、調性に対する感覚は、楽曲の音楽的要素と身体感覚を結びつけることにある。また、歌詞の意味や内容、語感の理解を含む、言語と音楽の関係を理解することである。さらに、楽曲のジャンルを知り、音楽構造を把握することが重要である。

これらの多様な事象と演奏家の関係が「密接」となるためには、楽譜や資料を読み、さらに実際に演奏する一身体を通した関わりを持つ行為が不可欠である。それにより、演奏表現が決定し、それが経験として蓄積される。

また、ソルフェージュ教育にスコア・リーディングを取り入れるための3つの授業案を提起した。

1. 楽譜や資料から知識を得る方法を指導者が学習者に提示する案
2. ピアノや声楽を含む各楽器の演奏法を実践的に理解する方法を導く案
3. 音楽に関する知識や感覚を指導者と学習者間で共有し、それを演奏表現に繋げるための案

視唱や聴音などのあらゆる訓練は、スコア・リーディングの本質と切り離せないものであり、スコアを用いたソルフェージュ教育を行うことにより、深い楽曲理解を伴う演奏表現を導くことができる。いままで作曲された膨大な楽曲を通し、学習者と指導者が共に音楽に向き合う貴重な場であるソルフェージュの特性を活かした授業案を、本研究において提起することができた。

演奏家や作曲家、音楽学者だけではなく、音楽に関わるあらゆる人々、すなわち、美術や文学の研究者とその愛好家、楽器制作者や音楽愛好家など、あらゆる人々と知識や感覚を共有することにより、新しい音楽文化が生まれる。それは、やがて音楽家の社会的役割を支える原動力となると確信している。本研究が、その第一歩となることを願って、今後も音楽活動を行っていききたい。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、19世紀パリにおけるオペラとピアノの関係に焦点を当て、ドニゼッティの《ランメルモールのルチア》およびモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》から一部分を抜粋、題材とし、フル・スコアをピアノで演奏表現する行為の分析を行うことにより、スコア・リーディングの本質と可能性が、楽譜を通した様々な事象と演奏者間に密接な関わりがあることを明らかにしようと試みたものである。さらに、スコア・リーディングを活かしたソルフェージュ教育を行うために、重視すべき点と授業案を提起している。

私の所見にも述べたが、スコア・リーディングに関する著作は過去に練習書、教材、方法論について書かれたものしか存在せず、スコア・リーディングそのものを研究対象として書かれた論文は初出であることの価値は十分認められる所であるが、審査会では主に以下の点について指摘がなされた。

1. ピアノ発達の歴史について書かれた部分等、論文内容とは直接関係が薄い項が見られること、2. 曖昧な定義の単語等が見られること、3. ソルフェージュ教育への活用方法についての検証と記述が十分でないこと、である。さらに、それぞれの章においての独立性が多少強いと、焦点が多少ぶれてしまった印象を受けていると思われる。

しかしながら、上述したようにスコア・リーディングを研究対象として論述された有用性、また、ソルフェージュという研究分野における視点から論じている点を評価し、審査会では合格との結論に至った。